

### 「島橋康男宛 信綱書簡」展



昨年十一月、四日市市の島橋宗文氏から、信綱の手紙十一通をご寄贈いただきました。

信綱(代筆)から宗文氏の父で石薬師小学校長だった島橋康男(明治四十二〜平成三年)に宛てられた手紙で、石薬師文庫前に植樹された榎(昭和三十七年四月二十日)に関することや「弘綱(信綱父)碑前祭」に関する内容で大変興味深く、信綱と石薬師・石薬師小学校との結びつきがよくわかる資料です。特に、榎の植樹に関する手紙について、新聞記事内容とあわせて紹介します。

当時、石薬師小学校の教務主任をされていた島橋康男は、その種子を地元の木業を営む犬飼勇五郎に託しました。

その後、康男の転勤でこの話はとぎれてしまいましたが、昭和三十六年に康男が同校の校長(同四十二年)となり、再び勇五郎を訪ねたところ、六本の榎が立派に育っていました。康男は早速、石薬師文庫への榎の植樹を信綱に知らせたようで、信綱から「昭和三十六年十月七日」付の返書が届いています。信綱は返書で、康男と勇五郎への感謝の意と、さらに榎にあつた運び賃や植え付け料等の費用の負担まで申し出ています。

植樹後の「同三十七年五月一日」付の手紙では、信綱は自分と同様に亡き父弘綱も喜び感謝しているだろうと、あらためて感謝の意を書き送っています。

現在、榎は石薬師文庫前と後に二本あり、文庫前の方は平成十九年に後継樹(当初の榎の二世)に植え替えられました。また、「竹柏」とも表記し、師弟共研を理想とした弘綱・信綱親子の特別な思いを象徴する樹です。今後先人たちの思いとともに、大切に伝えていきたいです。

### 「佐佐木信綱 研究」創刊

歌誌「心の花」会員を中心とする佐佐木信綱研究会(平成二十三年二月発会)から、「佐佐木信綱研究創刊〇号・一号」(同二十五年六・十二月)が発刊されました。今後の信綱研究の発展が期待されます。

### 信綱と村岡花子

三月末から、NHK連続テレビ小説「花子とアン」が放映されます。主人公のモデルは翻訳家・児童文学者の村岡花子(明治二十六〜昭和四十三年)で、カナダ人作家モンゴメリの『赤毛のアン』を翻訳・出版したことで知られています。花子は、十代後半(明治四十二年頃)から十年ほど、信綱に短歌の指導を仰いでいたようです。『心の花 佐佐木信綱追悼号「竹柏 会昭和三十三年」の寄稿文「佐佐木先生のおもいで―十八の頃―」で花子は、「佐佐木先生のことを考えると、

自分の十八才を思出す。そのころ、(柳原)白蓮(明治十八〜昭和四十二年。明治三十三年、信綱に師事)女史が、ずいぶん年代が遅れて、私たちの学校(現東洋英和女学院)へ入学した。彼女としては既に人生の重要なひとこまをすごしたあとだった。(略)その年の十一月ごろだったろうか、私は彼女に連れられて先生の門をくぐった。(略)先生は大きな机の前に和服ですわつていらした。ややせきこんだ調子で話をされるくせの人らしかった。『樋口』一葉さんがわたしのところへ初めて来たのも十八でした。ポツンとこれだけおつしやつた」と、信綱との出会いについて回想しています。

また、「片山ひろ子(明治十一〜昭和三十三年。明治二十九年、信綱に師事)さんは母校の大先輩であつたが私が先生のお宅へ初めてあがつた日に、すぐ先生は、「あなたの学校の先輩に片山ひろ子さんという人があつた。大変すぐれた人だから紹介してあげましょう。あなたは片山さんについて欧米の文学を読みなさい」ともおつしやつた」と、花子は述べています。信綱はすでに花子の将来を予見していたのかもしれない。



### 再編『竹柏園姓名録』

坂倉 賢芳

平成十八年、筆者は「竹柏園姓名録」を出版いたしました。これは松阪の故出丸恒雄氏の佐々木弘綱研究の成果を基とし、その上に皇學館大学高倉一紀教授の編まれた「佐々木弘綱年譜(上)」を参考にしながらの上梓でありました。このたびの姓名録は、始めから揃っていない資料からのものであり、不十分の上なものであったという反省から、敢えて「校訂・増補」とせず、「再編」としました。

この間、「佐々木弘綱年譜(中)・(下)」(平成十九・二十二年)が、いずれも高倉教授と石水博物館の龍泉寺由佳氏との共編で完成されました。この「弘綱年譜(中)・(下)」、それに「千代田歌集」、「宝田集」、「開化新題和歌梯」、「月瀬梅風集」、「日本

歌学全書」に出てくる人名を加え、先の「竹柏園姓名録」より大幅に増えた三千四百名余の姓名録が出来上がりました。



弘綱肖像画

### 概要

構成は先の姓名録を踏襲いたしました。

交流のあつた

- 一、徳川慶喜將軍を始めとする各藩々主
- 二、藤堂高猷をはじめとする三重

県の大名

- 三、高田本山専修寺法主・伊勢神宮大宮司
- 四、皇太后・親王・公卿

五、江戸中後期及び幕末の志士別

に項目を立ててあります。県別では、弘綱・信綱の故郷であ

### 目次

寄稿「再編『竹柏園姓名録』」 坂倉賢芳	1
記念館ニュース「平成二十五年年度特別展報告ほか」	
「新資料の紹介」 信綱一首(二十八)	
展示室だより	
信綱関連情報	
ります三重県を最初とし、沖縄県を最後としています。三重県内だけは市町村別に分けて、姓名録を仕上げました。外国としては唯一、イギリスの王堂があります。	
続いて各種関連人物、各歌集の不詳者となりました。	
弘綱をめぐる人物紹介 (福羽美静・勝海舟・正岡子規)	
弘綱の三十年来の親友であり、子爵で国学者の福羽美静は、「君、美衣美食を好まず、人に交わる篤実、人を導くこと極めて懇切なり」「君は、官に仕うるにあらずして世に譽を得たり」と、弘綱を評価する讃辞を述べています。	
また、西郷隆盛と会見して江戸城の無血開城に尽くした勝海舟は、弘綱を追悼して、「しげりそふ青葉にはなのあとたえていとむかしの忍ばるるかな」と詠じています。海舟は弘綱編の『明治開化和歌集』、「千代田歌集」、「宝田集」にも歌を寄せ	



『日本歌学全書(正)』

(龍淵寺・円光寺住職、郷土史家)

記念館 ニューズ

平成二十五年度 特別展報告



昨年十一月六日(水)〜十二月十五日(日)まで、特別展「郷土に残る弘綱・信綱親子の資料―石薬師を中心として―」を開催しました。

ました。特に、浄福寺蔵の信綱歌「ひとこゝろ浄福とみほとけのまもらす御寺とはにさかゑむ」の掛軸は、歌の中に詠み込まれた「浄福寺」の文字を探すのも面白く、お寺を讀めた内容の歌で、来館者の目をひきました。今回の特別展では、弘綱・信綱親子と師弟や知友であった各家々との関係を示す貴重な資料を一室に集めて展示することができ、石薬師町を中心に親子が残した新たな足跡を見出すよい機会となりました。また、昨年十二月で信綱没後五十年を迎えましたが、今でもなお、地元の人々の中で弘綱・信綱親子との親交が語り継がれている、その大切さを実感した特別展でもありました。



また、学芸員より特別展に関する解説を行いました。今回が、今回は地元・石薬師の人々を取り上げた内容であり、特別展に御協力賜りました皆様にも聴講いただきました。あらためて、厚くお礼申し上げます。また、年度より指定管理者制度を導入しております。各資料館とも地元との協働により、それぞれの施設の地域性及び特性を活かした運営をしていただいております。当記念館の管理運営も事業管理公社による運営から市直営の運営、そして、今回の指定管理者制度の導入と、その時々に応じた形態を経てきました。来年度からの四年間は、指定管理者の佐佐木信綱顕彰会に担っていただきます。同顕彰会は、信綱はもとより、その父である弘綱の功績についても長年にわたって顕彰活動に取り組み、市民文化の向上に資する幾多の事業を展開されています。同顕彰会による新たな運営に期待いたします。なお、特別展の企画をはじめ、資料収集・整理、展示替え等の学術的な分野については、従来どおり学芸員が担当いたします。市内唯一の文学館としての役割を果たすべく、努めて参りますので、今後ともよろしく願います。

指定管理者制度への移行について

講演会

十一月九日(土)午後一時三十分から、鈴鹿市・佐佐木信綱顕彰会主催の講演会が開催されました。日本文藝家協会会員の津坂治男氏に「石薬師に集う和歌の道」という題目で御講演を賜りました。

平成二十六年より、当記念館の日常管理運営が、市直営から指定管理者による管理運営に移行します。指定管理者制度とは、「公の施設の管理」について、民間の力を活用し、住民サービスの向上を図る制度であります。市内の資料館においては、既に稲生民俗資料館、庄野宿資料館、伊勢型紙資料館の三施設が平成十八

つた小口静雄(天保九〜明治四十二年。国学者)を訪ねたと思われ。静雄宅で宿泊した際に弘綱は歌の揮毫を請われ、返礼の意も込めて自賛歌及び旅で得た歌をしたためて贈ったと考えられます。



新資料の紹介

今回は購入資料から、弘綱歌掛軸と信綱歌掛軸を紹介します。

○弘綱歌掛軸

題詠別五首とその歌を記した年月や状況が特定できる掛軸であり、弘綱独特の流麗な筆跡とあわせて貴重な資料です。

名所花 みよしの(吉野)は花より外の色もなし桜を山の姿にはして

湖杜鵑

すはの海(諏訪湖)に声をちらして子規啼わたりゆく花岡の里

(軍営月・閑居雪・寄道祝以下略)

明治九年五月 下諏訪なる小口氏のためにしるす 佐々木弘綱



弘綱が書いた日記(佐々木弘綱年譜(上))高倉一紀編皇學館大學神道研究所平成十年)によれば、明治九年五月二十

三日の項に「岡谷をたち、天龍川をつたひ、南小川内村(現長野県上伊那郡箕輪町東箕輪南小川内)小口氏二泊」との記述があります。この時、四十九歳の弘綱は、六十五日間の旅(「東京三遊」)を楽しんでいたようです。弘綱は四月一日に石薬師を立立し、三日に四日市港から蒸気船に乗り、五日に品川に着きました。東京の知人を訪ね歩いた後、十九日に東京を立立。中山道に入り、二十四日に深谷宿(埼玉)、五月三日に高崎宿(群馬)を経て、六日に小田井宿(長野)に至っています。この辺りで弘綱はしばらく遊び、十八日に和田峠を越えました。そこから少し中山道を離れ、岡谷・小河内等に寄り、大平峠を越えて中山道に戻り、三十日に中津川(岐阜)、津島(愛知)、桑名を経て、六月四日に石薬師に帰着という長旅でありました。この旅の途中で弘綱は、交遊のあ

○信綱歌掛軸

寒けにも雪をいた、くとま(苦)舟の中よりも、子らの笑ひ声

\*:「寒けにも」の「も」の一字が多  
い以外は、歌集「豊旗雲」収録  
歌と同じ

信綱一首28

名におへる森の大木のかげふみてあふぎまつらふ神の恵を

大木神社内信綱歌碑(昭和五十七年建碑)

名高い大木神社の森の大きな木の下、その影をふみながら、神のお恵みをうやまい申し上げるの「信綱かるた」より

大木神社は石薬師町にある延喜式内社で、鈴鹿市指定天然記念物の椎の森がおこなな景観を成す。信綱の産土の社。歌碑には、この一首と「月」の朝日のあさ父と共にもうまつりし産土のもり」の一首が刻まれている。